

ウィルマ・エラージックの遊びに関する一考察

A Study of the “Ellersiek-Spiele” by Wilma Ellersiek

近 藤 千 草
(Chigusa KONDO)

1. 研究の目的と方法

最初のヴァルドルフ幼稚園¹⁾は、1926年、ドイツのシュツットガルトに設立された。設立者は、エリザベス・グルネリウス（Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895-1989 以下「グルネリウス」と示す）であり、今日には世界75カ国、1928園にまで広がりを見せている²⁾。しかし、幼稚園設立期の形成過程については、先行研究も少ない。そこで筆者は、設立者であるグルネリウスや、幼稚園開設の3年後に教師として加わったクララ・ハッターマン（Klara Hattermann 1909-2003 以下「ハッターマン」と示す）について調査を行い、草創期の幼稚園に関する形成過程の整理を試みた。その結果、グルネリウスはドイツ国内のみならず、アメリカやフランスにも幼稚園を創設してヴァルドルフ幼稚園の拡大を図ったことや、ヴァルドルフ幼児教育の実践を記した“Waldorf School Plan”³⁾を出版し、ヴァルドルフ幼児教育を広く世に示した功績が明らかになった。一方、ハッターマンは、ドイツのハノーバー、ドレスデンに複数の幼稚園を創設すると共に、ヴァルドルフ幼稚園教員の養成や、ヴァルドルフ幼児教育を推進する国内・国際的な協会を設立するという功績を遺した。今日に引き継がれるヴァルドルフ幼児教育の根幹を形作った二人のパイオニアの調査を進めると、両者に関わった人物が多くいたこともわかってきた⁴⁾。

その一人にウィルマ・エラージック（Wilma Ellersiek 1921-2007 以下「エラージック」と示す）がいる。エラージックは、シュツットガルト音楽大学（Staatliche Hochschule für Musik und Darstellende Kunst Stuttgart）⁵⁾の講師であった人物であり、1962年にハッターマン41歳の時にエラージックと出会っている⁶⁾。ハッターマンは、エラージックとの出会いを通し、幼児のための歌、音楽、手遊び、ライゲン⁷⁾をヴァルドルフ幼稚園の保育実践に取り入れていった。中でもライゲンは、現在においてもヴァルドルフ幼児教育の保育内容としての根幹をなす重要な位置づけにある。しかし、ヴァルドルフ幼児教育において中心的な保育内容を開発したエラージックという人物について、また、エラージックが提唱した遊びの実態に関する先行研究は見当たらない。そこで本稿では、ヴァルドルフ幼児教育の形成初期に携わったエラージックに焦点を当て、エラージックの人物像に迫ると共に、エラージックの提唱した遊び“Ellersiek-Spiele”の基盤について調査したい。

ウィルマ・エラージックについての資料収集を試みたが、調査した限りにおいてはその情報は少ない。資料の一つは、マンフレッド・ベルガー（Manfred Berger）の論考“Klara Hattermann (1909-2003)”である。そこには、「ヴァルドルフ幼稚園の教師は、就学前の子どもためにリズムカルな

手遊びを開発したウィルマ・エラージックと協力して教育実践に取り組んだ。クララ・ハッターマンの励ましにより、エラージックは、多数のワークショップやワーキンググループ活動を行い、また、全てのヴァルドルフ幼稚園における朝の集まりやライゲン、日常生活の様々な移り変わり場面のための“Ellersiek-Spiele”を作成した⁸⁾と記されている。もう一つの資料は、「めたもるふおーぜ 290号」において嶋村（2021）が「シュタイナー幼稚園・もう一人のパイオニア」の論考の中で、「ハッターマンは1962年にシュツットガルト音楽大学講師だったエラージック（Wilma・Ellersiek 1921～2007）と出会います。その出会いによってハッターマンは幼児のためのたくさんの手遊びやライゲン（シュタイナー幼稚園で行われているリズム遊びの一つ）、歌や音楽をヴァルドルフ幼稚園に送り出しました⁹⁾と説明している。その他、エラージック自らが著した遊びに関する文献が残されているのみである。エラージックの功績は、現在、“INSEL”（Institut für die Spiele von Wilma Ellersiek e.V.）（ウィルマ・エラージック遊び研究所 以下、「INSEL」と示す）に引き継がれている¹⁰⁾。INSELは2014年春に設立され、講座の開催、情報発信、文献紹介を行うと共に、エラージックによって作成された遊びを守り、促進させ、さらなる開発と普及に取り組んでいる。そして、エラージックの精神を受け継ぐ遊びの実践者を養成する機関として存在している。

以上のように先行研究及び資料の少ない状況があるため、本論考では2つの資料及びINSELを中心にエラージックの遊びについて整理を試み、“Ellersiek Spiele”の特質をつかみたい。

2. ウィルマ・エラージックの人物像

エラージックの死後、“Institut für die Spiele von Wilma Ellersiek e.V”（INSEL）「ウィルマ・エラージックによる手遊び研究所」が創設され、今日ではホームページを通じて研究所の取り組みとエラージックの功績について知ることができる。エラージックの人生については、「リズムに捧げる人生¹¹⁾」と題して次のように紹介されている。

エラージックは1921年6月15日、ドイツのシュレスヴィヒホルシュタイン州（Schleswig-Holstein）¹²⁾で誕生した。ここは自然豊かな土地で、幼少期のエラージックは、「波のリズム、犬、猫、鶏、アヒル、馬、風の音」を遊び相手として育った。エラージック自身も友達には「花、木、砂、星」と認識しており、自然と共に過ごし、自然への関心が高かった。また、バルト海近くの土地であったため、「海で生じるリズムの現象」や「自然のリズム」が、その後の人生に大きく影響した。1927年にはヴェストファーレン（Westfalen）¹³⁾に引っ越しているが、隣家が農場だったこともあり身近に動物がいる環境であった。以前の環境と同様にエラージックの周囲には、とうもろこし畑が風に揺れる音や、リズムカルな波などがあった。幼稚園、小学校時代には、友人との遊びも加わるが、その遊びの中心は歌を歌うことや踊ることであり、幼少期のエラージックの生活には、音楽やリズムが浸透していたことがわかる。

その後、エラージックはアビトゥーア（Abitur）¹⁴⁾を受け、1941年にライプツィヒ（Leipzig）にて、音楽、ドイツ研究、美術史などを学んだが、深刻な病気のために勉強を中断せざるを得なくな

ると共に、1945年に戦争の混乱により家族は東部から逃げることを余儀なくされた¹⁵⁾。そしてエッセン (Essen)¹⁶⁾ の学校で学びを再開し、専攻したのは「リズム・音楽教育」であった。その後、シュトゥットガルト音楽大学で学びを続けた。ここでエラージックは、リトミックの創始者であるエミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze 1865～1950)¹⁷⁾ の子弟であるエルフリーデ・フォイデル (Elfriede Feudel 1881-1966) から学ぶ機会を得、リトミックと共に言語教育も学び、1957年に国家試験で両方の科目を修了した。

シュトゥットガルト音楽大学で学んだエラージックは、同校において、「リズム」、「演劇」、「言葉」部門の助手として在籍することとなった。後にエラージックは教授となっている。大学での仕事に加え、エラージックはシュトゥットガルト、ウィーン、ロンドンなどのオペラハウスや劇場で演出を行った。あくまでもエラージックが魅了するものはリズムであり、特に子どもの動き、言葉、音楽に対するリズムとその影響についての研究に取り組んでいた。エラージックのテーマに関する研究は物議を醸し、1968年にバーデンヴュルテンベルク州¹⁸⁾ から関連する研究契約を交わした。この研究を機に、就学前の子どものための「遊び」(Gestenspiele) が生み出された。最初の小さな取り組みは、細心の注意を払われながら、韻を踏む言語とリズムと音楽が織り交ぜられた手遊びとして開発された。

エラージックは当初、母親または父親と一緒に子どもたちに教えることを考えており、このコースを「両親のための講座 (Elternschule)」と呼んだ。1960年代後半、シュトゥットガルト音楽大学は、エラージックのためにリトミック分野の「就学前の子どものリトミック (Rhythmik in der Vorschulzeit)」施設を設立した。この頃にエラージックはハッターマンとも出会い、生涯にわたる友情を築いていく。ハッターマンはエラージックの新たな遊びに関心を抱き、エラージックが抱える様々な困難を乗り越えてその研究を継続するように励まし、世界へと広めていく。

エラージックは、25年にわたって大学で教授し、1983年に退職した。その後エラージックは一層、創造的な活動を行い多くの遊びを作り出した。この間、ハノーバーではハッターマンを中心に協会が作られ、2003年9月にハッターマンが亡くなった後もエラージックは遊びの開発に集中的に取り組み、ハッターマンの幼稚園にできる限りの遊びを提供することに配慮した。エラージックの手遊びは、芸術的な観点から言語のリズムと適切な動きにより、自然界の風、花、動物、太陽、月、星などの自然界と子どもとを結びつけるような方法が取られている。このように、エラージックは、今日の子どもたちに遊びによる自然なリズムを通して、癒しと自然を愛することの大切さを伝えている。

2007年10月27日の早朝、エラージックは亡くなった。虚弱体質で重い病氣と闘っていたにもかかわらず、人生の後半では幼い子どもの幸福を最も重要視し、当時の子どもの魂に対する物質世界からの攻撃が、エラージックに遊びの開発を促した。エラージックによる遊びは、「言語と音楽のリズム、子どもたちへの愛情で脈動する芸術作品」と認識されている。

紹介文の中で注目に値する箇所は、ハッターマンがエラージックの遊びに関心をもちその活動を

広めている点と、エラージックが遊びの開発に努めた背景に子どもの魂に対する物質世界からの攻撃があると指摘している点である。この説明から、エラージックはシュタイナーの人智学的教育観を基に遊びを開発し、ハッターマンと共に遊びを価値づけ、ヴァルドルフ幼稚園において取り入れていたことが推測される。

3. “Ellersiek Spiele” の基盤としての霊学思想と教育の在り方

前項においてエラージックは、人智学的な観点から遊びを開発していったことに触れた。シュタイナーの教育論の根底には人智学（Anthroposophy）、すなわち「霊学（Geistwissenschaft）」の存在がある。現代科学では、霊的なものの実存を認めず、感覚的に知覚できる物質を根拠として思考・判断することが主流である。しかし、シュタイナーは、物質が存在するためには何らかの力が作用しなければ物質として存在することはできないと捉え、その作用を意味する霊的な力が物質に働きかけることにより様々な現象として現れると考える。人間という物質に着目しても、霊的な作用が働くからこそ成長する姿となって見ることができると解釈するのである。したがって、霊学の観点から人間を見た場合、人間の物質的な肉体が全てではなく、肉体を支える霊的な力を認識することで、現実的に見える肉体の成長についても正しく捉えることができると理解する。このようにシュタイナーは、人間は目に見える物質と、目には見えない霊の両側面から成る存在と捉え、このような人間の本質を正しく認識することの重要性を主張し、「人間の隠された本質を観察することから始めなくてはなりません」¹⁹⁾と述べる。

では、人間の隠された本質とはどのようなものなのであろうか。シュタイナーは人間の本質を「物質体（physischerleib）」、「エーテル体（Ätherleib）」、「アストラル体（Astralleib）」、「自我体（Ich）」の4つの構成体から成ると考えた。人間の本質を構成する一つは、「物質体」で人間の肉体がこれにあたり、霊学の観点からは鉱物界と同じ物質として認識される。人間は物質から成るものの、その中に第二の本質である「エーテル体」、すなわち「生命活動」、「生命力」を携えており、物質体としての人間の体にエーテル体の作用によって生長や生殖、体液の内的な活動現象を作り上げる。その意味でシュタイナーは、エーテル体は物質体の「設計者」、「彫刻家」、「居住者」、「建築家」という表現を用いて説明している²⁰⁾。第三の本質は、「アストラル体」であり、「感覚体」とも言われる。外からもたらされる刺激が、人間の内面（例：快感、苦痛、衝動、欲望、情熱など）として映し出される作用である。シュタイナーは、アストラル体を「感情生活の担い手」²¹⁾と表現している。第四の本質は、「自我体」である。人間の特性は、「私」という言葉を用いて自分自身の存在を認めていく点にあり、こうした自我を持つのは人間のみである。自我についてシュタイナーは、「高次の人間の魂の担い手」²²⁾と呼んでいる。自我の力が他の本質に働きかけ、より高次に作り変えられていく。自我は物質体にも影響を及ぼし、例えば、顔つきや身振りや動きを変化させる。人間の本質は、誕生から自我の働きを通してより進歩を遂げ変化していくのである。

このような4つの人間の本質は、発達の時期や方法が異なるとシュタイナーは捉え、発達の法則

を理解する必要性を主張する。人間の本質の中で最も早く成長を捉えられるのは、物質体である。シュタイナーは、人間の誕生を「物質的な意味において誕生する」と言い、その意味について「母親の物質的な覆い（母体）が子どもを外に送り出し、物質的な環境が直接子どもに働きかけるようになる」²³⁾と説明する。人間は母体の中で守られ、母体を通じて栄養が与えられて胎児へと発達し、物質的に誕生する。しかし、誕生から歯が生え変わる7歳頃までは、エーテル体が自力で成長することはできず、周りの助けを借りながら生命活動を行っていく。エーテル体の成長が進み、次第に自身の力で生命活動ができるようになるが、その節目は、物質の中で最も硬い乳歯を押し出し、永久歯へと生え変わらせる現象で、7歳頃に現れる。この後、14歳頃を目途にエーテル体は徐々に自力で生命活動を行い成長する力を高めていく。その節目となるのが、性的な成熟である。性的な成熟を迎える前のアストラル体は、人間の内部に向けて働いていたが、性的な成熟により生殖器官が自立するようになる頃には、アストラル体が覆いを破り、様々な感情として内面的な事象を映し出すことができるようになるのである。

このように、人間は4つの本質から成る存在とみなし、4つの本質は相互に覆いを通して交わりながらも各本質の発達には順序性があり、一つの本質の覆いが外されることによって、次に育つ本質が芽生えていくという構造があった。このような人間の4つの本質に対して最もふさわしい環境や方法を用いて教育を行う必要がある。この点についてシュタイナーは、『ある特定の年齢において、人間の本質のどの部分に働きかけなくてはならないか』ということや、『このような働きかけは、実際にどのようにして行えばよいのか』ということを知っておかなければなりません²⁴⁾と述べている。では、各本質に対して、どの時期にどのような教育を行っていくことが重要なのであろうか。

物質体がこの世に誕生することにより、まず人間としての肉体的な器官を形成していくことが課題となる。そのためには、器官が健康に育つような環境を整え、働きかけを行うことが重要である。シュタイナーは、環境を通して健康な器官が作られていくことについて、「もし子どもを取り巻く環境のなかに、正しい色彩と光の関係を作り出すようにすると、健全な視覚が形成されます。子どもが周囲に道徳的なものを見ると、健全な道徳的感覚の基盤が脳と血液循環の中に形成されます」²⁵⁾と述べている。また、シュタイナーの認識する環境については、『物質的な環境』という言葉は、子どものまわりで物質的に生じていることだけを意味しているわけではありません。この言葉には、子どもを取り巻く世界で生じることや、子どもの感覚が知覚することや、物質的な空間から子どもの霊的な力に働きかけてくるものすべてが含まれています。さらにこの言葉は、子どもが目にするすべての道徳的な行為や不道徳な行為、賢明な行為や愚かな行為を意味しています²⁶⁾と述べ、物質体の健全な育成には、適切な物質的環境からの影響と共に、周囲の大人の行為や作用などの在り方が直結しているということを意味する。この時期の子どもの教育は、リズムや響き、音を聞くことを通して五感に働きかけることが重要である。こうした物的・人的な環境から生じる事象を子どもは模倣し、物質体に刺激を与え、吸収することによって、物質体としての器官は形成さ

れていく。つまり、大人の存在や環境構成の在り方が、子どもの健康な物質体を築くか否かにかかっていると言える。シュタイナーによれば、自身の肉体にとって何が役に立つのか、その尺度を自身で作ることができるという²⁷⁾。したがって、大人は、その子どもにとって何が役に立つのか、欲求や喜びは何かを読み取ることが重要であり、そうした読み取りを基にした愛情ある働きかけや子どもに対する真摯な気持ち、信頼に満ちた模範としての態度こそが、健康な物質体を形成するのである。

乳歯が永久歯に生え変わると、物質体を覆っていたエーテル体が解き放たれ、物質体としての肉体が自らの力で生命活動を営み成長する力を持つようになる。この時に「エーテル体が担っている好み、習慣、良心、性格、記憶力、気質」²⁸⁾が変化していく。子どものイメージを通して想像力を働かすことが、エーテル体の形成を促すことにつながる。シュタイナーは、「想像力が、生き生きとした霊的なイメージや比喩に含まれている深い意味を解き明かすと、それがエーテル体が成長するための指針になります」²⁹⁾と述べ、直観的な作用を教育に求める。教育者は、子どもから道徳的で知的な存在として直観され、尊敬や畏敬の念を抱かれる存在であることが、エーテル体形成の支柱となる。教育の中心には、子どもが模範したい、見習いたいと思う人の存在と、そのイメージを通して想像力を高めていく話力が求められる。さらに、象徴を通して様々な存在を理解していくことができる教育が重要である。エーテル体の形成期においては、悟性の形成段階には至っていない。そこでエーテル体が担っている感情を通して事象を理解できるようにしていくことが重要になり、シュタイナーは「具象的な比喩」³⁰⁾を使う必要性を主張する。比喩や象徴、美的な感覚や芸術的なものに対する感情の呼び覚ましに配慮することが求められる。音楽的な要素は、エーテル体にリズムを送り込む作用がある³¹⁾。さらに、この時期に重要な育みは、記憶力の発達である。シュタイナーが捉える記憶は、抽象的な概念を訓練して記憶するというのではなく、「感情や感覚や心情を使って理解する」と捉えられている³²⁾。したがって、この時期の教育には、「建築学的な様式の形態や、彫塑的な形態や、線描や製図、色彩の調和に対する感覚を目覚めさせるような授業をかならず盛り込むようにしなければなりません」³³⁾とシュタイナーは言う。美しいものや芸術的な感覚を養うことは、道徳的な感覚を実感することにもつながっていく。そして、性的な成熟が見られる14歳頃になるとアストラル体（感覚体）が活発化し、抽象的な概念の理解や思考・判断する力に対して外から働きかけることができるようになる。

シュタイナーは、霊学の観点から人間の発達と教育の在り方を述べているが、霊学の観点から見た教育は、「理論に基づく学問的な根拠よりも、実践こそが、霊学的な認識が真実だということをはっきりと証明してくれるのだ」³⁴⁾と実践の根拠を重要視すると共に、「自分は成長している」、「自分のなかでたえず力が上昇している」³⁵⁾と変容を認識する人間像を捉えている。特に乳幼児期という物質体が成長を遂げる時期においては、「喜びや心地よさといった感情が、肉体の姿勢や動きとともに、どのような作用を生み出すのか、ということについての、細部にわたる、直観的で真の感情の伴った認識」³⁶⁾を教育者が持って実践することが重要なのである。

以上、シュタイナーの人間観と発達に即した教育の在り方について見てきたが、エラージックの遊びが、シュタイナーの霊学的観点に立ってどのような実践として現れているのか次項より見ていきたい。

4. 「エラージックの遊び研究所（INSEL）」から捉える“Ellersiek Spiele”

4-1. INSEL の組織

「エラージックの遊び研究所（INSEL）」は、エラージックの没（2007年）後、エラージックの実績を継承・発展するための組織として2014年に設立された。組織の目的は、幼児期の発達を促進することであり、7分野から実現に向けて取り組んでいる³⁷⁾。

- ①運動、言語習得、言語育成の分野
- ②初等段階の音楽分野
- ③サルトジェネシスの観点からの健康
- ④特別なニーズを持つ子ども
- ⑤エラージックが0歳から7歳までの子ども向けに作成したりズミカルな音楽リズム、言語・運動遊びの促進、開発及び普及
- ⑥エラージックの遊び実践者の教育、養成
- ⑦親子コース、セミナー、会議、講義などを通した成人教育、及び文献やメディアによる実践の普及

本協会は、2014年の設立より15名の会員から構成される³⁸⁾。協会の目的の一つであるエラージックの遊びを継承し普及できる人材の養成は大きな課題である。養成の中心を担っているのは、イングリッド・ヴァイデンフェルド（Ingrid Weidenfeld）であり、他10名の講師が配置されている³⁹⁾。

学習内容は、次の通りである⁴⁰⁾。

モジュール1：遊びの中の言語と音楽

モジュール2：子どもの発達段階とルドルフ・シュタイナーの感覚理論

モジュール3：5度の音階

モジュール4：子どもの言語と運動の発達

モジュール5：精神的な側面及び子どもの宗教性

モジュール6：ウィルマ・エラージックの作品に見る治療的側面

上記学習内容に示されているように、エラージックの遊び理論の根底には、シュタイナーの発達論や人間観が含まれていることがわかる。

4-2. エラージックの遊びの根底

「ウィルマ・エラージックの遊び研究所（INSEL）」では、「ウィルマ・エラージックによるリズムミカルな音楽遊びは、子どものための明るく芸術的なものです。ファンタジーの力に刺激された子

どもの魂は、おとぎ話のように遊びに没頭することができます。韻を踏む言語には、身振りや動きが伴います。空間で行われ、全身に浸透し、活性化します。言語と運動能力は感情的な共感を伴って機能するため、遊びには深い癒し効果があります」⁴¹⁾と説明している。エラージックの遊びの特徴は、遊びが言語と運動能力と感情が連動している点であり、音の響きやファンタジーの力が伴って子どもの全身に働きかける点にある。では、エラージックの遊びは具体的にどのような実践となっているのだろうか。エラージックによる実践の内容は、書籍とビデオ・DVDとして残されており、イングリッド・ヴァイデンフェルドによって編集され、「自由精神生活出版社シュツットガルト」(Verlag Freies Geistesleben Stuttgart)より出版されている⁴²⁾。以下、書籍の概要を示すことで、エラージックの遊びの特徴をつかみたい。

①書名「触る一手遊び」

本書は、「愛撫」としても知られる手遊びで、大人が子どもと一緒に遊び、韻を踏む歌詞と優しい触れ合いが含まれている。大人は音楽的に構成された言語を伴ながら、穏やかに愛撫するが、これは今日の子どものための新しい手遊びである。子どもの発達に関する知識に基づき、言語的・音楽的・芸術的な観点から作られた「乳児のための手遊び」(die allerkleinsten Spiele)⁴³⁾と言える。

②書名「手遊び、ライゲン、円舞 (春/夏)」

子どもが自然との健全な関係を育むためには、植物界や動物界の無数の小さな不思議を子どもに気づかせる大人の繊細な在り方が重要である。エラージックの作った春と夏の季節に合わせた手遊び、円舞や歌は、子どもが自然の現象に集中し、親しみ、それらとつながることを可能にするものである。

③書名「手遊び、ライゲン、円舞 (秋/冬)」

本書は、色とりどりの葉、10月の金色の太陽、秋の嵐と霧、雨の日と寒い日、提灯の光、初雪と凍った湖、暗い季節、リズミカルな音楽の詩、円舞、手遊びの歌、これらすべてを表現している。エラージックの秋と冬の遊びは、1年の最も暗い時期に子どもにとって明るさを提示する。遊びには、リズミカルで音楽的な要素が浸透しており、自然界の形成に沿って芸術的に設計された内容となっている。子ども、教育者、保護者は、風がそよぐ音、激しい嵐、鈍い霧、初雪などに敏感である。

④書名「羊飼いと王の遊び」

エラージックの手遊びや動作遊びは、動きと言語を結びつけて意味づける。本書には、幼稚園にも家族にも適したアドベントとクリスマスの季節の遊びが示されている。3歳から6歳までの子どもの簡単なごっこ遊び(Verwandlungsspiele)で、役割分担はない。遊びの中で子どもは、羊飼、メアリー、ヨセフ、天使、王、そして動物になる協同遊びを行う。

⑤書名「忍び足でやって来る者は誰？」

エラージックの手遊びは、子どもが動作と言語で世界の意味を体験できるようにしている。動物

をテーマにした遊びは、動物界の多様性に気づかせる豊富なレパートリーを保護者や教育者に提供している。動物遊びは、季節に関係なく、9歳までの子どもに長期的に活用することができる遊びである。

⑥書名「踊る、遊ぶ手」

踊りや手遊びのためには、言語に合わせた手、拳、親指、人差し指の動きが特に重要である。それらは子どもの脳の言語中枢を刺激し、言語発達を促進する。動きに喜びを感じる遊びは、言語本来の純粹な音を体験することを可能にする。エラージックの遊びに取り組んでいる大人は、踊りのリズムを手だけでなく、舌や体全体がどのように活気づけられていくかを体験することができる。

⑦書名「子守唄－5度の穏やかな子守唄」

5度の気分の子守唄は、長調でも短調でもない単純な音域で構成されている。これらの曲のメロディーは、5音間隔、つまり「5番目」がポイントとなる。子どもは、5度の音空間の時に夢を見、その中で安心することができる。本書には、子どもの心を落ち着かせるメロディーに加え、5度の調律に関する情報が含まれている。

⑧書名「小人たち、ドワーフ、エルフ、小さな生き物」

手と身体のリズミカルで音楽的な動きの連続性の中に、詩や5度の気分の歌を組み合わせることにより、子どもは四大元素の本質を体験する。それは後の感情的な経験と知的な理解に先行する精神的な経験となる。エラージックによる手遊びは、幼稚園における動きの要素を豊かにし、教育的な効果をもたらす。子どもは四大元素の世界に没頭し、遊びの中でサンタにも巨人にも人魚にもなることができる。

⑨書名「ベビーベッドでの手遊び」

本書は、エラージックによって1歳から3歳までの子ども向けの手遊びをまとめたものである。3歳からの子ども向けに開発した遊びは、子どものニーズに合わせて巧みに調整されている。託児所やデイケアセンターでは、近年、それらの需要が大幅に増加している。エラージックの手遊びは、多くのヴァルドルフ幼稚園で定着し、人気が高まっている。3歳未満の子どもも言葉や動きの発達という点で、これらの特別な遊びから恩恵を受ける。子どもは言語・音楽と遊びの豊かな世界に没頭するため、簡単な手遊びに参加できるとよい。イングリッド・ヴァイデンフェルド（Ingrid Weidenfeld）は、子どものために40以上の遊びや歌を編集し、託児所で使用できるようにした。

以上、9冊の概要から、エラージックの手遊びの特徴は、①「大人と子どもとの身体的な触れ合い」があること、②「植物界、動物界、自然、季節、気候、四大元素といった自然現象」を取り扱っていること、③「5度の気分」に象徴されるような音と子どもの発達との関連性を重視していること、④「動き、言葉、音が組み合わせられ、体全体を通したリズム」を構成していることであることがわかる。次項では、実際の手遊びを取り上げ、その特徴や意義について考察したい。

4-3. 遊びの実際

エラージックによる手遊びの実例を2つ取り上げる。まず、詩と手遊びの方法を示し、その後、特徴と意義について考察したい。

4-3-1. 事例1 「小さなカタツムリ」(So macht es das Schneckelein)⁴⁴⁾

(1) 詩

カタツムリは殻から這い出します。
カタツムリは小さな触覚を出します。
鼻先であしらう 鼻先であしらう
カタツムリは小さな触覚を引き戻します。
そして這って家に戻る。
小さなカタツムリ

(2) 方法

【場面1】カタツムリは殻から這い出します。

- ①子どもの手を拳にして、ベッドやテーブルの上、または大人の掌の上に置く。
- ②カタツムリのゆっくりしたペースで旋律的に話しながら、人差し指で子どもの拳の中央から親指の付け根まで螺旋を描く。

【場面2】カタツムリは小さな触覚を出します。

子どもの右手の人差し指の付け根と親指の間の隙間に人差し指の先を入れる。

【場面3】鼻先であしらう 鼻先であしらう

子どもの親指と人差し指を離し、指先で「触覚」を軽くたたく。優しくタッチする。

【場面4】カタツムリは小さな触覚を引き戻します

子どもの指を、再び拳の中へそっと押し戻す。

【場面5】そして這って家に戻る。

- ①人差し指の先で、子どもの親指の付け根から手の甲の中央まで、包み込むような螺旋を（左に）描き始める。再び「カタツムリのペース」で旋律的に話す。
- ②最後に、「戻る」と言うときに、人差し指で手の表面をそっとくすぐる。

【場面6】小さなカタツムリ

小さなカタツムリは家の中で保護されて座っているように、子どもの緩んだ握りこぶしを両手でそっと握りしめる。

手遊び「小さなカタツムリ」で意識することは、手は自我領域にあるという点である。この手遊びは、我が国においても「かたつむりさん」として実践されており、ドイツのハノーバーにあるシュタイナー幼稚園教諭養成課程を修了し、ハッターマンに20年師事した嶋村⁴⁵⁾は、動画「シュタイナー教育 手遊びが育む子どもの心と体～かたつむりさん～」⁴⁶⁾の中で手遊びについて次のように解説している。

＜日本語の詩＞

かたつむりさんが、お家を出ます。

小さな角を出して、シュツ、シュツ。

角をしまって お家に帰ります。

かたつむりさん これは○○ちゃんの手。

手遊び「かたつむりさん」で重要なことは、「この手は私の手ということがわかる」こと、「私の指ということが意識化される」ということである。そのために、手を触る行為を通して意識化していく。手の構造は、腕の骨から手首へとつながり、5本の指へと別れて曲げることのできる点が特徴である。自分の体の一部としてある手という存在が、「私の手」、「私の指」という認識へと高めていくことができるように、「かたつむりさん これは○○ちゃんの手」という最後の場面では、拳から出ていた親指と人差し指を拳の中にしまい、大人が両掌でしっかりと押さえることにより、子どもは自分の手である意識を持ち、自分の手を大事に思い、自分の手に対して共感を抱くことができると考えられている。

本手遊びはゆっくりとしたペースで、静かに語ることに特徴が見出されることから、多動の子どもにとっても効果がある。多動の特徴は、静止することが難しい点にある。子どもが後に思考に代表される知的な側面が成長するためには、幼児期に静止するという体験を積み重ねていくことが重要となる。そのために、大人はゆっくりとしたペースで話をし、身体に意識が向くように子どもの身体を撫で、撫でる手を止めて静止と静けさを感じていくことが重要である。

手遊びの中で眼差しを子どもの顔や身体全体に向けていくことも特徴の一つである。子どもは動くものへ視線を向け、行為への関心を抱く。静かな声による詩の語りと共に、優しく触れる大人の手から生じる温もりを感じることで、子どもは落ち着きと気持ちの良さを感じる。手遊びを通した「静けさ」と「静止」が「かたつむりさん」の効果として期待される。

4-3-2. 事例2「雨」⁴⁷⁾

(1) 詩

ぼとぼとぼとぼと頭の上に

ぼとぼとぼとぼと鼻の上

ぼとぼとぼとぼと草の上

みんなびしょ濡れ

みんなびしょ濡れ

(2) 方法

【場面1】ぼとぼとぼとぼと頭の上に

両手の指を細かく動かして頭の上を触る。

【場面2】ぼとぼとぼとぼと鼻の上

頭から両手を鼻まで持っていき、両手の指を細かく動かして鼻先を触る。

【場面3】ぽとぽとぽとぽと草の上

鼻先から両手を下へと降ろしていき、太ももを触る。

【場面4】みんなびしょ濡れ

両手で頭から肩、腕、足先まで触り、足先を両手で握る。

【場面5】みんなびしょ濡れ

もう一度、両手で頭から肩、腕、足先まで触り、足先を両手で握る。

手遊び「雨」は、全身を使う手遊びである。両指先で「ぽつぽつ」と言いながら頭から徐々に体の下部に向かっていく。頭の場面では、頭頂部は避けるようにして触れるが、それは乳児の泉門がまだ閉まっていないことによる。泉門を避けてその周辺に触れるが、その強さは「かすかに触れる」程度である。かすかな動作により子どもは触られている部分へ意識を向け、感覚を研ぎ澄ます。触られることを嫌がる子どもに対しては、かすかに触れるくらいの感覚で進めていく。手から伝わる優しさや心地よさを感じる点が重要である。

手遊びは、頭から足へと進んでいくが、太ももの付け根から足先へと触れることで、足が伸びている感覚を持つことができ、末端の方へ意識を向けることができる。足先を押さえることにより、末端の足の部分まで自身の足であることを実感することができる。頭の天辺から足先までを触ることは、子どもの中に繊細な感覚を意識化させる効果として期待される。

6. まとめ

本稿では、全世界に広がりを見せる多くのヴァルドルフ幼稚園において取り入れられている遊びについて、その開発者であるウィルマ・エラージックという人物像に迫ると共に、実際の遊びの事例を取り上げ、その意義を考察してきた。エラージックが遊びの内容として重要視したことは、INSELにおいて「言語と音楽のリズム、子どもたちへの愛情で脈動する芸術作品」と説明するように、幼児期の子どもが最も成長する部分へのアプローチであり、人への愛情や信頼といった良好な関係性を育むための芸術的な遊びであった。こうした遊びを開発した背景には、エラージックの幼少期からの自然との深い関わりが大きく影響し、遊びには、風、花、動物、太陽、月、星などの自然界と子どもとを結びつけるような方法が取られ、遊びを通した自然なリズムによって癒しと自然を愛することの大切さを伝えている点に特徴が見出された。

こうしたエラージックの遊びを支える支柱には、人智学（霊学）の思想があった。人智学思想における人間理解、すなわち、人間は「物質体」、「エーテル体」、「アストラル体」、「自我体」の4つの構成体から成り、これら人間の本質には成長の順序性があることを捉えていた。乳幼児期に最も成長する本質は「物質体」であり、肉体的な器官を形成していくことが最も重要な課題となる。そのためには、器官が健康に育つような環境を整え、働きかけを行うことが求められる。エラージックはこのような観点から、ファンタジーの力に刺激されるような遊び、韻を踏む言語に身振りや動きが伴う遊び、全身に浸透し活性化する遊び、感情的な共感を伴って機能する遊びを開発し、遊び

を通した癒しの効果に着目したのである。遊びの特徴は、愛撫を通し、韻を踏む歌詞と優しい触れ合いが含まれている遊び、植物界や動物界の無数の小さな不思議を子どもに気づかせる遊び、色とりどりの葉・10月の金色の太陽・秋の嵐と霧・雨の日と寒い日・提灯の光・初雪と凍った湖・暗い季節といった人間と季節との関係性を感じ取る遊び、四大元素の本質を体験する遊び、5度の音空間を感じる遊びなどがあり、エラージックの手遊びの特徴は、①「大人と子どもとの身体的な触れ合い」があること、②「植物界、動物界、自然、季節、気候、四大元素といった自然現象」を取り扱っていること、③「5度の気分に象徴されるような音と子どもの発達との関連性」を重視していること、④「動き、言葉、音が組み合わせられ、体全体を通したリズム」を構成していることが明らかとなった。

エラージックの遊びは、今日でも多くのヴァルドルフ幼稚園や幼児教育施設において実践されていることを鑑み、実際の遊び事例を考察した。一つは、「小さなカタツムリ」という遊びで、大人と子どもが向かい合ってカタツムリに見立てた子どもの拳の上を大人が指で円を描き、触覚に見立てた指を出したり引っ込ませたりしながら手や指への意識を向けるものであった。シュタイナーはある特定の年齢において、人間の本質のどの部分に働きかけなくてはならないかを考えることの大切さを述べていたが、「小さなカタツムリ」という手遊びからは、子ども自身の体に目を向けさせ、感覚を通して手の存在を見出し、自身の一部を構成する重要な「私の手」であることを認識させる意義が捉えられた。同時に、人智学の思想に則った成長への働きかけを行う手遊びであったと言える。もう一つの事例は、「雨」という手遊びであったが、こちらも前事例同様に、大人と子どもが向かい合い、体全身に触れていく遊びであった。大人の手は子どもの身体にかすかに触れる程度の動きであるが、こうした繊細な動きを感じ取ろうと意識することで、感覚や感触に意識を向けることができる。頭の上から足先まで全身を触ることで、いつもは意識しない部分までも自分の体の一部として認識することができる。本事例においても、シュタイナーの人智学的人間学に基づいて、子ども自身が「自分の体」という認識を持ち、成長と共に「自分は成長している」、「自分のなかでたえず力が上昇している」と変容を認識することができる人間へと成長することが目指されている。同時に、喜びや心地よさといった感情が肉体の動きの中で生み出されることを直観的に認識できる人間へと成長することが重視されていたと考えられる。

以上のことから、エラージックが開発した遊びは、シュタイナーの考える人間の本質に沿った内容であり、発達段階にふさわしい方法が取られていることが推察された。本稿で取り上げた事例は一部のものに過ぎず、より多くの実践例からシュタイナーの人智学思想に基づく内容であるか分析を行っていく必要がある。また、エラージックの功績としての文献の解説を通し、エラージックの遊びの本質に迫ると共に、ヴァルドルフ幼児教育の意義との関連性の中で更なる考察を行っていくことを今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

- 1) 我が国では「シュタイナー幼稚園」と呼ばれる傾向にあるが、世界的には「ヴァルドルフ」の名称が用いられることが多いため、本稿では「ヴァルドルフ」の表記を用いることとする。
- 2) Waldorf World List 2022
https://www.freundewaldorf.de/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf 閲覧日：2022年12月12日
- 3) E・M グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と教示教育』、フレーベル館
- 4) 近藤千草、2022、「クララ・ハッターマンのバイオグラフィーに関する考察—資料整理を中心に—」、青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第66号、青山学院大学教育学会、pp.73-93
- 5) シュットガルト音楽大学 (Staatliche Hochschule für Musik und Darstellende Kunst Stuttgart)
<https://www.hmdk-stuttgart.de/home/> 閲覧日：2023年8月31日
- 6) 西川恵美子、古賀千花編、2021、「めたもるふおーぜ290号」、めたもるもーぜ編集部、p.16
- 7) ライゲン (Reigen) とは、ルドルフ・シュタイナーの教育理論に基づくヴァルドルフ幼児教育施設に取り入れられている保育内容の一つである。ライゲンは、保育者が先導して歌や詩を唱えながら、それに合わせた動作を行う活動で、「リズム」と「言葉」と「動作」が一体となってライゲンのテーマを表現している点が特徴である。
- 8) Manfred Berger, “Klara Hattermann (1909–2003)” nifbe (Niedersächsisches Institut für frühkindliche Bildung und Entwicklung)
<https://www.nifbe.de/component/themensammlung?view=item&id=816:klara-hattermann-1909-2003>
閲覧日：2022年12月21日
- 9) めたもるふおーぜ編集部、2021、嶋村慶子、「シュタイナー幼稚園・もう一人のバイオニア」、『めたもるふおーぜ290号』、p.16
- 10) INSEL ホームページ <https://www.handgestenspiele.de/> 閲覧日：2022年12月23日
- 11) “Wilma Ellersiek Ein Leben für den Rhythmus”
URL:<file:///D:/%EF%BC%B7ima%20%EF%BC%A5llersiek%E7%A0%94%E7%A9%B6/HANDGESTENSPIELE%20Wilma%20Ellersiek%E3%80%80Ein%20Leben%20f%C3%BCr%20den%20Rhythmus/Wilma%20Ellersiek%20%20handgestenspiele.html> 閲覧日：2022年11月11日
- 12) シュレスヴィヒホルシュタイン州 (Schleswig-Holstein)
州都：Kiel (キール) 人口：289万人 北海とバルト海の間に位置する。
ドイツ連邦共和国大使館総領事館
URL: <https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/schleswig-holstein/954528>
閲覧日：2022年11月11日
- 13) ノルトライン＝ヴェストファーレン州 (Nordrhein-Westfalen)
州都：デュッセルドルフ (Düsseldorf) 人口：1,791万人
ドイツ連邦共和国大使館総領事館
URL:<https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/nordrhein-westfalen/921450>
閲覧日：2022年11月11日
- 14) ドイツの大学共通入学試験
- 15) ライプツィヒ (Leipzig) は、ザクセン州 (州都：ドレスデン 〈Dresden〉)、人口は408万人の都市である。
ドイツ連邦共和国大使館総領事館
<https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/sachsen/930834> 閲覧日：2022年11月11日
エラージックがライプツィヒのどこの学校で学んだのか、深刻な病気とはどのような状況であったのか、本資料では示されていない。
- 16) エッセン (Essen) は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州 (Nordrhein-Westfalen) にあり、州都はデュッセルドルフ (Düsseldorf) である。人口1,791万人の都市である。

<https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/nordrhein-westfalen/921450> 閲覧日：2022年11月11日

- 17) エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865～1950）

日本ジャック＝ダルクローズ協会 リトミック

リトミックとは、スイスの作曲家・音楽教育家である エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865～1950）によって創られた音楽を総合的・合理的に学ぶための音楽教育法であり、全身を使って音楽を動きで表現するリトミック、音楽を聴く耳を育てるソルフェージュ、即興演奏を組み合わせ、音楽の諸要素を体験することを教育法の原点に置いている。この目的は、音楽理解を深め、動きによって得た筋肉感覚を生かし、その積み重ねにより自己を開放し、磨かれた感性をもとに音楽表現を可能にすることである。

URL: <https://www.j-dalcroze-society.com/eurythmics>

閲覧日：2022年11月11日

- 18) バーデン＝ヴュルテンベルク州 州都：シュトゥットガルト（Stuttgart） 人口1,102万人

ドイツ連邦共和国大使館総領事館

URL: <https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/baden-wuerttemberg/983968>

閲覧日：2022年11月11日

- 19) ルドルフ・シュタイナー、松浦賢訳、2020、『完全版 霊学の観点からの子どもの教育』（Die Erziehung des Kindes von Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft）、イザラ書房、p.45

- 20) 前掲書19) pp.49-50

- 21) 前掲書19) p.51

- 22) 前掲書19) p.52

- 23) 前掲書19) p.59

- 24) 前掲書19) p.62

- 25) 前掲書19) p.66

- 26) 前掲書19) pp.64-65

- 27) 前掲書19) p.69

- 28) 前掲書19) p.72

- 29) 前掲書19) p.73

- 30) 前掲書19) p.77

- 31) 前掲書19) p.91

- 32) 前掲書19) p.81

- 33) 前掲書19) p.91

- 34) 前掲書19) p.94

- 35) 前掲書19) p.93

- 36) 前掲書19) p.93

- 37) INSEL <https://www.handgestenspiele.de/verein.html> 閲覧日：2023年8月31日

- 38) 前掲資料37) 閲覧日：2023年8月31日

- 39) INSEL URL:<https://www.handgestenspiele.de/lernen.html> 閲覧日：2022年12月23日

- 40) 前掲資料39) 閲覧日：2022年12月26日

- 41) INSEL <https://www.handgestenspiele.de/ellersiek-spiele.html#main-menu-toggle>

閲覧日：2023年8月31日

- 42) INSEL <https://www.handgestenspiele.de/buecher.html> 閲覧日：2023年8月31日

- 43) 前掲資料42) 閲覧日：2023年8月31日

- 44) INSEL <https://www.handgestenspiele.de/so-macht-es-das-schneckelein.html>

閲覧日：2023年8月31日

- 45) 前掲書9) p.20

- 46) 動画「シュタイナー教育 手遊びが育む子どもの心と体～かたつむりさん～」<https://www.youtube.com/watch?v=TPFVW3Wxr0o> 視聴日：2022年12月26日

- 47) 動画「シュタイナー教育 手遊びが育む子どもの心と体～あめ～」

URL:<https://www.youtube.com/watch?v=cpI9RMa5lbA> 視聴日：2022年12月26日